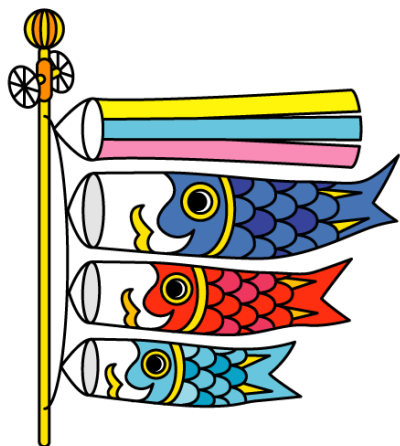


# ほっと通信



新緑がまぶしい季節となりました。

新しい学級での1か月が過ぎ、先生方も子どもたちも慣れてきた頃ではないかと思えます。

今年度も特別支援教育担当では、学校の先生方のサポートができるよう活動していきたいと思えますので、どうぞよろしくお願いいたします。

## 平成22年度を振り返り

教育センターに特別支援教育担当という部署が置かれ、早いもので5年目を迎えることになりました。巡回相談の中心になる心理士も初年度の2名から平成22年度は4名体制になり、学校からの要請に対して微力ですが支援のお手伝いができていると感じています。

たくさんの先生方とお会いして思うことは、以前は「検査をとって欲しい（それだけが目的）。」「今、困っている。だからどうすれば良いのですか？」というお話を伺うことが少なくありませんでしたが、今は、単に心理士に意見を求めるのではなく、ときには保護者を交えて同じテーブルの上で『みんなで子どものことを考えていく』ということがお互いに分かり合えてきました。その結果、支援をするために訪問している心理士等にとって、先生方のたくさんのご意見を聞かせていただくことが次の巡回の栄養になっていることを実感しています。

学校を訪問させていただく件数がとても増えています。これは、先生方が中学校に上がる時や学年が変わるときに、子どもの様子を再確認したいという思いから声をかけていただく回数が増えていることなどによります。

平成22年度の巡回の対象になった児童・生徒数は、約270名でした。この数は、今後も増えていくと思われます。たくさんの先生方に特別支援教育担当を利用していただいたことを感謝しつつも、繁忙時期には、学校の日程に合わせた訪問が困難にもなっています。ご迷惑をおかけすることもあると思えますが、今後ともよろしくお願いいたします。

今年度も、先生方のご要望に応えていきたいと思っています。

## 特集 1年生の学級作りを振り返って

1年生を担当するという事は新しい出会いという楽しみがある一方で、どんな子どもたちが、どう1年間を見通せばよいかと戸惑われることも多いのではないかと思います。本号では、昨年度小中学校で1年生を担当した先生方が1年間を通し心がけたことや取り組まれたことをご紹介します。

### 「1年生の学級作り」

1年生の学級作りは、ちょっと心してかかります。まずは着席して話が聞けることを身につけさせることに力を注ぎます。登校して教室に入ってから下校準備まで、いろいろな約束事に時間を割いて話をします。飽きないように作業を入れながら、聞く指導に徹します。すると、3日目には「先生、今日も勉強しなかったね」と子どもたちが言います。子どもたちは、教科書やノートを使うことが勉強だと思っているので、「今日もいっぱい勉強したじゃない」と言うと「???」となります。でも、確実に着席してよい姿勢で話が聞ける子になります。



次はどの子にも同じ学力をつけるための戦いが始まります。入学したての子どもたちの中には、課題がすんなりできる子と、時間をかけてあげる必要のある子との二極化が進んで、個人差が大きくなったからです。1年間、学力や生活力をつけてあげたいと考え、時間の必要な子にできる手立ては、お残しです。1年生は「先生と一緒にもっと勉強ができるからお残しが好き」なのだそうです。入学段階では、時間をかける必要のある子が特別支援の必要な子なのかどうか見極めるのは困難です。そこで「この子がわかれば大丈夫」を物差しに、わかりやすく話す、黒板で示すことを心がけています。

東浅川小学校 主幹教諭 川原 敦子先生

### 「学級作りの工夫」

学級は、子どもたちにとって、安心して過ごせる、居心地のいいものでなくてはなりません。そんなクラスを作るために、私はいつも「わかる授業」と「楽しい活動」を心がけています。

「わかる授業」を実現するために、3つの工夫をしています。

#### ① 話をしっかり伝える工夫

- ・ 適切な言葉を選んで、的確に指示する。
- ・ 話すだけでなく、板書して指示する。
- ・ 正しく伝わっているか、問いかけてみる。

#### ② 一人一人に意欲を持たせる工夫

- ・ よいモデル（よい姿勢・挙手・発言・整った文字など）を具体的にほめ、めあてをはっきりさせる。
- ・ 机間指導で具体的にほめ、その場で目に見える評価（花丸やスタンプなど）をする。
- ・ 以前より頑張れたことを具体的にほめ、みんなに紹介する。

#### ③ わかった！できた！実感を持たせる。

- ・ 個々の課題をはっきりさせ、家庭と連携して個別指導をする（個別宿題など）。
- ・ 成果を見える形で残す（ワークシート集・シールカードなど）。
- ・ 成果をみんなに紹介し、認め合うようにする（拍手など）。



「楽しい活動をする」ために、3つのことに留意しています。

#### ① 価値ある楽しさを理解させる

- ・ 頑張ってる楽しさ（よい行いやよい習慣を認め、Goodマークを掲示する）。
- ・ みんなの楽しさ（みんなが集めたGoodマーク5個で読み聞かせ、10個でお楽しみ会をする）。

## ② 一生懸命に取り組ませる

- ・ 一人ひとりの役割をはっきりさせる（朝の会や帰りの会のプログラム（せりふ）を掲示する。毎日できる係活動を取り入れる）。
- ・ 頑張りを認め、ほめ合う（帰りの会で「頑張ったことやよかったこと」と発表させる場面を設ける）。

## ③ 楽しかった！よかった！実感を味わわせる。

- ・ 活動のまとめをする（教師の思いを具体的な言葉で伝える）。
- ・ 子どもたちの感想を聞く（言葉で表現させる。拍手で認め合う）。

このような取り組みをしてもなお、学習につまずきが見られたり、クラスに馴染めなかつたりする子どもがいた場合、その原因がどこにあるのか、どうすればよりよい状態になるのか、学校と保護者、専門家など、子どもに関わるみんなで考えていこうと思っています。

由井第二小学校 主任教諭 浅輪 和代先生

## 「学級通信の取り組み」

私が昨年度取り組んだことは「子どもの居場所のあるクラスづくり」です。現在横山中学校では不登校ゼロを目指す取り組みを進めています。私は不登校生徒を未然に防ぐために「子どもの居場所のあるクラスづくり」に取り組みました。そのために様々な取り組みをしましたが、そのなかの一つに学級通信の取り組みがあります。それも、「こういうことがありました」という事後型の学級通信だけでなく、「こういうことに取り組もう」という事前型の学級通信に力を入れました。例えば合唱祭で優勝しようという学級通信をかなり早めに作ります。そして、そのためにどうしたら良いか合唱委員が考えます。考えてきてくれたことを学活で反省、次はこうしようと学級通信に載せるという流れになります。この流れを様々な行事、さらには授業、生活に応用し学級通信を出しました。

こうした取り組みを続けるなかで、昨年度私のクラスから不登校は出ませんでした。学級通信のみでこの成果が出たわけではありませんが、様々な取り組みを支える役割をしたのが学級通信だと私は考えています。学級通信によって係活動が充実し、クラスの連帯感が生まれ、「子どもの居場所のあるクラス」が作れたのではないかと思います。



横山中学校 教諭 田口 出先生

### キーワード

### 『目標』

新学期はさまざまな目標をたてる機会があるだろうと思います。個別の配慮の必要な児童生徒への指導においても、現状に応じた目標をたて、本人と一緒に振り返る機会を持つ、といった取り組みをされる先生方も多いのではないのでしょうか。

その際、どんな目標をたてているのでしょうか。“こうあってほしい”という大人側の願いが大きく反映されただけの目標になってはいないのでしょうか。実現可能な、子どもががんばればできそうな目標になっていますか？ 子どもにとっては無理難題の目標をつい2つ、3つと並べていませんか？ “～をしない” “～はダメ”などの禁止事項ばかりになっていませんか？

目標というのは、そこに向かうための指標となります。子どもが目標に向かってがんばるためには、そのなりにこれならできそうと思えることや、達成することで“できた” “がんばれた”という気持ちを味わうことが大切です。そういった気持ちが次に向かう意欲へとつながるのです。高望みしすぎず、子どものやる気を引き出すような目標をたてていただけたらなと思います。

文責：心理士 中村桂子

3月11日、大きな地震が発生しました。八王子に住む子ども、あるいは被災地から転入してくる子どもを支える先生方にも気がかりなことは多いのではないかと思います。そこで、今回は災害を体験した子どもの心の理解やサポートについて考えてみたいと思います。

● 災害を体験した子どもたちの感情

- ・ 漠然とした不安
- ・ 特定のもの/ことに対する恐怖感
- ・ いらいら、抑うつ感、無力感、孤独感、不信感… など

● 災害を体験した子どもたちの行動

- ・ 落ち着きがなくなった、キレやすくなった、ぼんやりするようになった
- ・ 赤ちゃん返り（甘え、夜泣き、おねしょ、指しゃぶり…）
- ・ 食欲がなくなった、眠れなくなった、悪い夢を見る
- ・ 依存的になる、自己中心的になる、できていたことができなくなる
- ・ 音や揺れに敏感になった
- ・ 体の調子が悪くなった（腹痛、頭痛、下痢・嘔吐、動悸…） など



これらの感情を強く感じる子ども、まったく感じない子ども、無反応や無表情になったりする子ども、平気を装ったりいつもより明るく振舞おうとしたりする子ども…など、反応は一人ひとり違います。これらの感情や行動は、大きな災害後に起こる正常な人間の反応であり、赤ちゃん返りは心の安全を取り戻そうとするための反応でもあります。さらに、災害以前からあった家族間の関係や葛藤、地域との関係、勉強や進学のこと…など日常のストレスも災害の混乱とともに浮上してくることがあります。それまではやり過ごせていたことに対しても過敏になったり傷つきやすくなったりしているので、注意が必要です。

また、子どもはことばではなく身体の反応や行動で表現することが多くあります。そして、大人に比べると自分の感情や考えを整理したり話せるようになるには時間がかかります。上記のような気持ちや行動になることは自然な反応であり、戻っていくまでには時間がかかると理解すること、子どものありのままの感じ方や表現を受け止めることがサポートの第一歩です。周囲の大人がいつもよりも少し意識的にスキンシップや笑顔、声の調子など、ことばだけではなく態度や行動でも安心感を伝えていくことが大切だと思います。

文責：心理士 渡瀬 恵

## 巡回相談のご案内

特別支援教育担当の心理士・研究主事などが、授業観察および聞き取り、ときには発達検査などを通して、発達の特性を見立て、先生方と一緒に校内での支援について考えていきます。

まずは電話でご相談ください。相談の進め方をご案内いたします。

**電話予約→情報共有→日程調整→巡回訪問→（状況により継続相談）**

特別支援教育担当： TEL 664-1615（直通）

